

# 中近世移行期における寺院と墓

幡鎌一弘

Temples and Graves during the Transitional Period between the Medieval and Early Modern Periods

はじめに

- ①奈良における觀音堂・西方寺
- ②中山墓と長岳寺・柳本墓  
おわりに

【本文要旨】

本稿は、十六世紀から十七世紀に及ぶ寺院の近世化の中で、葬送に従事する三昧聖の位置付けの変化を追つたものである。従来の研究では、「葬送法師」(埋葬にかかわらない墓寺の僧侶)の律宗から淨土宗への転換を十五世紀とし、十六世紀に三昧聖の仲間組織の成立が想定されていたが、それを史料上確認することは難しく、本稿では私は、新たに以下の二点を指摘した。

(1) 十六世紀後半の「葬送集団」は寺院に隣接する「墓寺」に定住し、村落の支配を受けつつも、「墓寺」を管轄する上位寺院(律宗・齋戒衆)の編成を受けていた。もつとも、編成を受けるといつても、主体性を持たなかつたわけではなく、死者の関係者の指示とは異なる場所に墓所を求めて、他村と争論を起すほど農業経営に関与していたのであり、その限りの自律性は有していた。よひて、仲間組織に展開する要件はある程度備えていたと考えられる。

(2) 十六世紀末から十七世紀初期の近世的な寺院制度の展開の中で、三昧聖の(聖寺)が顕在化してくる。それには、寺院と社会が分離し始め、その架構として影響力を持っていた律宗勢力(律院・齋戒衆)が後退していくこと、「墓寺」が本末体制に組み込まれて宗派色が強まり、「檀那寺」となることや、惣墓を利用する他の「檀那寺」の檀家との関係がもてなくなること、の二つの要素が考えられる。そして、移行期の中でもあえて画期を求めれば、寛永期となる。これらの結果、十七世紀中頃の三昧聖の組織化につながっていくと推定した。